

【ネタバレ注意！】

四世鶴屋南北

原作歌舞伎『桜姫東文章』あらすじ

一途に恋する美しき姫がはらはらと世の中を堕ちていく。

堕ちていくほど自由奔放に、強く、逞しく、妖艶に。

桜姫と強盗・権助、僧・清玄を巡る、恋と輪廻の波瀾万丈！

時は文化十四（1817）年、イギリス船が浦賀に来航したその年に、江戸の歌舞伎小屋・河原崎座で初演されたのが『桜姫東文章（さくらひめあずまぶんしょう）』。歌舞伎の演目で清玄桜姫物および隅田川物のひとつで、七幕九場から成ります。

情熱的な十七歳の桜姫を巡る男たちは、可憐な稚児と心中して生き残ってしまった高僧の清玄と、あらゆる悪事に手を染める盗賊の釣鐘権助。姫の寝床に忍び込み、貞操を奪った権助を忘れられず、暗闇の中でうっすら見えた桜と釣鐘の刺青を自らの腕に彫るという、純真な桜姫の人生は、複雑に因果が絡み合って、聖と俗がまさに混沌、されど悦楽。

【発端 江の島稚児ヶ淵の場】——誓いの香箱の蓋を左手に握りしめて

「清玄殿～」 「白菊や～」 と暗闇の中ほうぼうを照らす灯り。

長谷寺の修行僧・清玄と相承院の稚児、白菊丸は相愛の仲。今生では一緒になれないと思い詰め、来世で夫婦になろうと寺を出奔し、江の島の稚児淵までやってきます。

お互いの名を記した起請（文書）代わりに香箱の蓋を白菊丸が、身を清玄が持ち、白菊丸は左手に蓋を握りしめて断崖から先に海に飛び込みます。一瞬躊躇して死に損なってしまった清玄。「清玄殿～」 「白菊や～」 と二人を探す声が遠く聞こえ、放心する清玄。一羽の白鷺がスイと飛び立ちます。

【序幕 新清水の場】——あるいは、愛の香箱ふたたび

一羽の白鷺が飛び立ってから十七年後。京の公家・吉田家の息女である桜姫十七歳は、可憐で美しく成長しましたが、生まれつき左手が開きません。桜姫には入間悪五郎という婚約者がいましたが、彼女の左手が生まれつき開かないことを理由に、婚約を破棄されてしまいます。

さらに吉田家を不幸が襲います。桜姫の父、少将惟貞は何者かに暗殺され、家宝「都鳥の一巻」も盗難。その家宝を探す旅に出た弟の梅若丸も、隅田川の堤で悪党に殺されてしまいます。

我が身の不具を憂い、世をはかなんで出家しようと桜姫が訪れたのが、桜が満開の新清水（鎌倉長谷寺）。出家を望み尼になろうと剃髪を願った桜姫に、長谷寺の高僧（阿闍梨の位）にまでのぼりつめていた清玄が十念（念仏）を授けると、固く結ばれていた姫の左手が開き、なんとその手から「清玄」の名が記された香箱の蓋が落ちます。

それを見た清玄は、十七年前の心中を思い出し、桜姫こそ、衆道（同性愛）の契りを交わした白菊丸の生まれ変わりだと確信するのです。

皆が去った後、「都鳥の一巻」を狙う悪五郎は、姫の手が開いたことを知り、仲間の釣鐘権助に再度縁組を求める艶書（手紙）をことづけます。

【桜谷草庵の場】——再び出会ってしまった、桜に釣鐘の刺青

出家の準備のために新清水の草庵にいる桜姫たちのもとに、権助が悪五郎の艶書を持って出家をとどまらせに来ます。権助は場を和ませるために滑稽話をして姫や腰元たちを笑わせるうち、二の腕の桜に釣鐘の刺青を見せてしまいます。

姫はとたんに態度を変え、腰元たちをさがらせて、自らの左の袖をまくり、権助と同じ桜に釣鐘の彫り物を見せます。「一年余り前、屋敷に忍びこんで私を強姦した顔もわからぬ男。その男の腕にちらりとみえた桜に釣鐘の刺青とそのひと夜を忘れられず、自らの腕に同じ絵柄を彫りつけました」と告白。さらに、権助に犯されて一子を産み落としたことも……。

権助と姫はしっかりと抱擁し、二度目の逢瀬を楽しみますが、清玄の弟子で役僧の残月に見とがめられ、権助は素早く逃走。その場に悪五郎もかけつけ大騒ぎとなります。姫が持っていた香箱の名から不義の相手は清玄と決めつけられますが、なぜか清玄は一切弁明することなく、女犯の罪を認め、桜姫と清玄は不義の罪で追放されます。そして残月も姫の局である長浦との関係を暴露され、同様に追放されます。

【二幕目 稲瀬川の場合】——姫を白菊丸の転生と信じる清玄

追放され、とうとう非人となった桜姫と清玄。互いの境遇を悲しみますが、姫は権助との間にできた子を抱いてこれからの不安を述べます。姫を白菊丸の転生と信じる清玄は、因果の恐ろしさから、覚えのない不義の罪を引き受けて、姫に夫婦になろうと迫りますが、姫は当惑。

そこに悪五郎が現れ、姫が自分の意に従うまでの人質として赤子を連れ去り、悪五郎と吉田家乗っ取りを企む松井源吾が姫を悪五郎の館に拉致しようとしませんが、止めようとした清玄ははずみでちぎれた姫の片袖を掴んだまま川へ落ちてしまいます。その間に逃げ去る桜姫。

悪五郎の後を吉田家の忠臣の栗津七郎が追いかけて、争ううちに、下へ置いたままの赤子は、川から這い上がった清玄の目に止まり、そのまま連れ去ります。

【三幕目 押上植木屋の場合】——桜姫、清玄、権助が登場しない三幕目が魂を揺さぶる

場所は、押上植木屋の門口（出入り口）。屋台に「団子茶や」の簾。そこに現れる稲野谷半兵衛。お茶屋でお茶を所望しながら、山田郡治兵衛という吉田の浪人の自宅を尋ねます。郡治兵衛は、吉田家の下僕である軍助の女房おしげが奉公する寺子屋の主人であったため、おしげは半兵衛を郡治兵衛の元へと案内します。

【三幕目 郡治兵衛内の場】——

「ほころびし花のたもとは風のみか、わりなく濡るる雨もいとわめ」

「手跡指南山田郡治兵衛」という表札がある郡治兵衛の家には、娘の小雛の許嫁である稲野谷半兵衛の弟の半十郎が匿われています。

久しぶりに訪ねてきた半兵衛は、小雛が唐傘に書いた歌、「ほころびし花のたもとは風のみか、わりなく濡るる雨もいとわめ」を見て、「この歌の心は恋歌」と、弟の半十郎と小雛が道ならぬことになったと言い立てます。

半兵衛は、否定する二人の言い分も聞かずに弟の首を打ち落としてしまいます。その有様を見た郡治兵衛も十六歳の娘小雛の首を落とします。

郡治兵衛と半兵衛は、追われている桜姫と弟の松若丸の身代わりに二人の首を差し出すという苦渋の決断を下したのです。

しかし、「ほころびし花のたもとは風のみか、わりなく濡るる雨もいとわめ」は、小雛が桜姫の身替りになる決意を傘に書いたものでした。

【四幕目 三囲堤の場】——雨そぼ降る中、すれ違う桜姫と清玄

桜姫への思いを断ちがたい清玄は、雨がそぼ降る中、赤子を抱いて姫を探し求め、三囲神社の鳥居前まで来ます。三囲堤で裏切り者の松井源吾と出会った軍助は、「都鳥の一巻」の返還を源吾に迫って斬り合いになりますが、深手を負って自害。

そこへ偶然、落ちぶれ果てた桜姫も破れ傘をさしてさまよい出てきます。暗闇の中、清玄が焚いた野火でようやく二人は近づきますが、雨で火は消え、二人は相手を確認められぬまま別れてしまいます。

【五幕目 岩淵庵室の場】——猛毒の青蜥蜴（あおとかげ）、雷鳴と生と死

不義の罪で寺を追い出された残月と長浦がわび住まいする北本所・岩淵地蔵堂に、桜姫を探す放浪の末に病気になった清玄が姫の赤子を連れて身を寄せています。そこに葛飾のお十が、死んだ子の冥福を祈りに地蔵参りに来ますが、鼻の下をのばす残月に長浦が嫉妬して、二人の言い争いが始まります。その物音に赤子が泣き始め、幼子の養育に頭を抱えている様子を見たお十は、「子供を亡くしたばかりで乳が出るから」と、赤子を引き取っていきます。

一段落ついて、あとくされがなくなった残月と長浦は、清玄が持っていた香箱の蓋をへそくり金だと勘違いし、医者からもらった薬だと青蜥蜴の毒薬を無理やり飲ませようとして毒を浴びせてしまい、清玄は片頬青あざとなった上に首を絞められて息絶えます。

残月と長浦は、墓掘り人夫となっていた権助を呼び寄せて墓を掘らせようとはしますが、人買いに連れてこられた桜姫と思いがけず再会。喜ぶ桜姫ですが、権助は姫を小塚原の女郎屋に売る相談に出かけてしまいます。桜姫が一人待っていると、落雷の衝撃で清玄が蘇生します。

病み衰えた上、青蜥蜴の毒が顔にかかり頬が焼けた醜い姿に、桜姫は恐怖のあまり立ちすくみますが、清玄は香箱の真実を話して姫に言い寄り、「未来で添おう、ともに死のう」と迫ります。姫の心は動きませんが、二人が争うはずみで持っていた出刃包丁が清玄の咽喉を突き死んでしまいます。そこへ姫を女郎屋へ売る算段をして権助が帰ってきますが、彼の片頬も清玄と同じくたれていたのです。

女郎屋へと向かう姫がつぶやく、「所詮この世は、毒食わば」。

【六幕目 山の宿町の場】——因果は巡る、そして吉田のお家再興

桜姫を女郎屋へ売った金で長屋の家主となった権助のところに、悪五郎が現れます。その用件とは「都鳥の一卷」の引き渡しですが、権助は「二千両の礼金と引き換えでなければ」と拒み、争ううちに悪五郎の刀を奪い殺害します。

権助は、自身の不義の子と知らずに長屋の捨て子を養育料三両二分と酒樽で引き取りますが、乳が出る葛飾のお十と仙太郎に「二十両で売ろう」と脅し、金が工面できなければ、お十をもらうと難癖をつけます。

そこに現れたのが籠屋の勘助。「小塚原の女郎屋に預けたお前の女房を連れてきた」と言います。理由を尋ねると、女郎屋に売られた桜姫は、腕にある小さな釣鐘の彫りものが風鈴に見えることと、お姫言葉を使うことから「風鈴お姫」と渾名されて売れっ子になったが、姫の枕元に清玄の幽霊が毎晩出るので客が寄りつかないと答えます。

権助が町内の寄合にでかけて一人になった桜姫。寝ようとしたところに清玄の亡霊が現れ、清玄と権助は実の兄弟であること、そばにいる赤子が稲瀬川で生き別れた子であることを告げます。そこへ酔っ払った権助が帰ってきて、懐から「松井の源吾様へ、信夫の惣太」という密書を落とします。

桜姫に「都鳥の一卷」を持っていることを口走った権助は、自分は盗賊の信夫の惣太で、悪五郎の頼みで吉田家当主を殺害して「都鳥の一卷」を奪い、幼い梅若丸をも殺害したことを白状します。桜姫は仇の血を引いた赤子は敵と泣きながら手をかけ、寝込んだ権助も討ち取ります。

【大詰 三社権現祭礼の場】——三社祭に、お姫様カムバック

三社祭でにぎわう浅草寺雷門の前、父と弟の梅若丸の仇を討ち、吉田家の家宝「都鳥の一卷」も奪い返した桜姫は、お家再興の願いも叶い、元の姫君に戻って、お十、栗津七郎らが集まって大団円を迎えます。